

十勝岳の火山活動解説資料（令和8年7月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

22日に62-2火口でごく小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上の高さ約200mまで上がりました。また、隣接する振子沢噴気孔群も含む62-2火口付近では、8月5日、6日（期間外）にもごく小規模な噴火が発生しています。

62-2火口付近では、ここ数年にわたり噴煙・噴気が多く、高感度の監視カメラで発光現象が時々観測されるなど、活発な熱活動が続いています。

3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示す地殻変動が継続し、4月以降は火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加や62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化が認められ、62-2火口付近の熱活動に、より高まりも認められています。

このように火山活動が高まった状態となっており、62-2火口及び隣接する振子沢噴気孔群付近では、その周辺に影響を及ぼす噴火が今後も発生する可能性があります。

62-2火口から概ね1.5kmの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和8年6月18日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3-①～②、図4、図6～9、図11、表1）

22日11時07分頃、62-2火口でごく小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上の高さ約200mまで上がりました。なお、噴火はごく短時間のうちに停止し、大きな噴石の飛散は確認されませんでした。十勝岳での噴火は、2004年2月25日から26日に発生したごく小規模な噴火以来です。また、8月5日、6日（期間外）にもごく小規模な噴火が発生しています。このうち8月5日の噴火については、国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測において、振子沢噴気孔群の一部から発生したことを確認しました。また、この上空からの観測では、2026年5月11日の観測と比べて振子沢噴気孔群で地熱域の高温化も認められました。

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態で経過しており、活発な噴煙活動が続いています。5月以降は噴煙がさらに高く上がる日が時折みられており、今期間噴煙の高さは最高で火口縁上1,000mまで上がりました。また、隣接する振子沢噴気孔群でも活発な噴気活動が続いており、噴気の高さは一時的に稜線上300mを超える日も見られました。大正火口の噴気の高さは200m以下で経過しました。

62-2火口付近では、4月以降、夜間に高感度の監視カメラで発光現象（火映を含む）がしばしば観測されており、今期間も度々観測されました。この現象は、62-2火口付近での高温の火山ガス噴出や硫黄の燃焼等によるものと考えられます。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータ及び機動的な調査観測・解析グループ（国立研究開発法人防災科学技術研究所・東京大学）の観測・解析結果を利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年8月分）は令和8年9月8日に発表する予定です。

・火山ガスの状況（図2-④、図3-③）

24日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたり2,300トンでした。また、機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学が16日に実施した現地調査でも、1日あたり2,000トン程度の火山ガス（二酸化硫黄）放出量を観測しています。3月以前と比べて多い状態が継続しています。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-⑤～⑦、図3-④⑤、図5、図10）

火山性地震は多い状態で経過しました。震源は主に62-2火口付近のごく浅い所、旧噴火口付近及びグラウンド火口付近のごく浅い所～深さ1km付近に分布しました。4月以降、62-2火口付近及びその周辺の地震活動がやや高まって推移しています。

22日の噴火に伴って、継続時間約45秒の火山性微動が発生しました。また今期間は、この他に振幅が小さく継続時間が短い火山性微動が4回発生しました。

・地殻変動の状況（図2-⑧、図12～13）

GNSS連続観測では、2021年以降、62-2火口付近の観測点を中心に山体浅部の収縮傾向を示す地殻変動が観測されていましたが、2022年以降次第に鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められていません。一方、山体を挟む一部の基線では、2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が認められています。

また、国土地理院によるGNSS連続観測及びその解析によると、「美瑛（国）」－「新得（国）」等の山体を挟む長い基線でも2026年3月末頃からわずかな伸びが見られています。

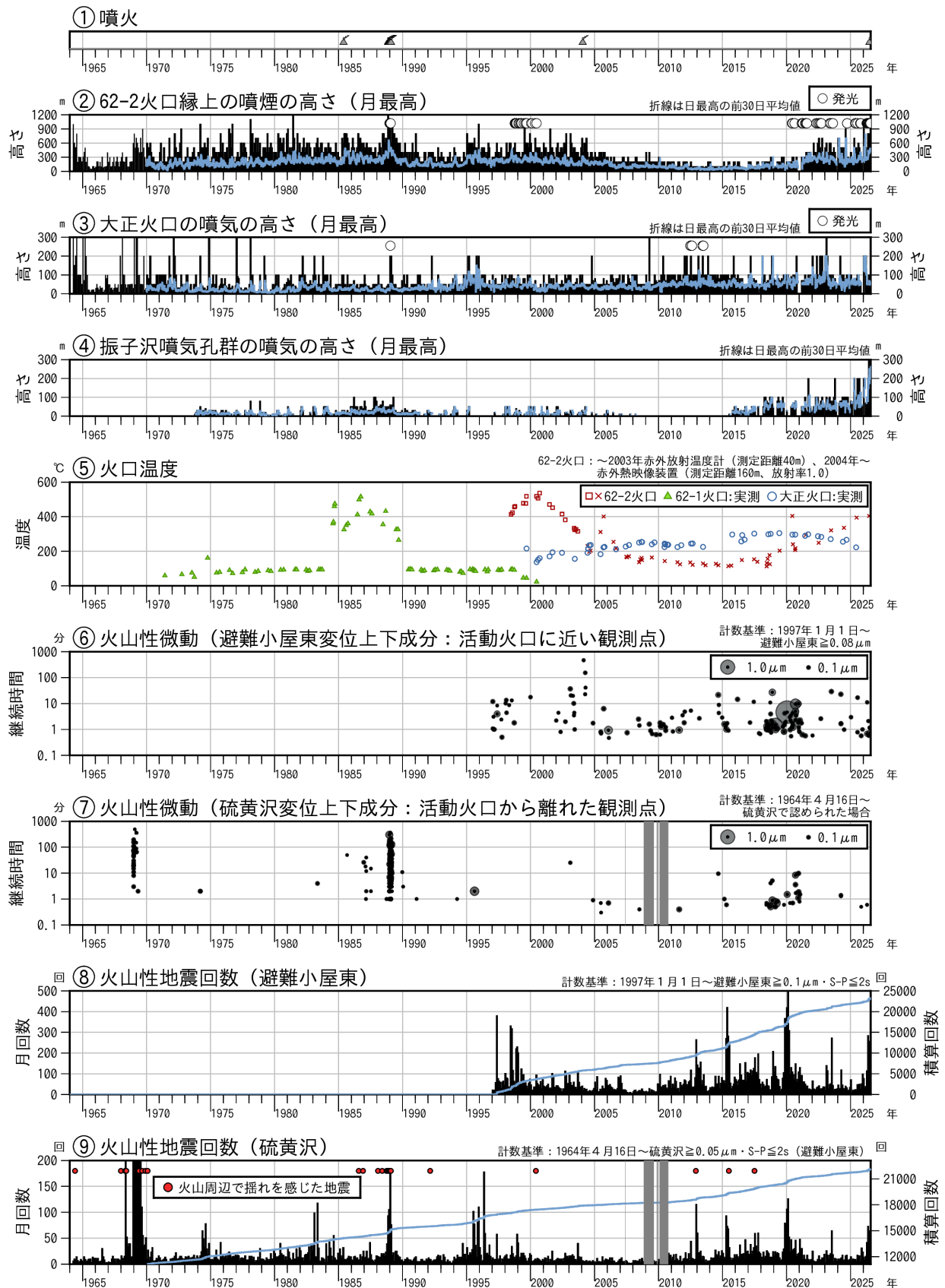


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2026年7月）

- ②の発光を示すプロットは、目視や監視カメラ等で62-2火口付近（62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。
- ⑤の62-2火口及び大正火口の温度は、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び国立研究開発法人産業技術総合研究所のデータを含みます。
- ⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

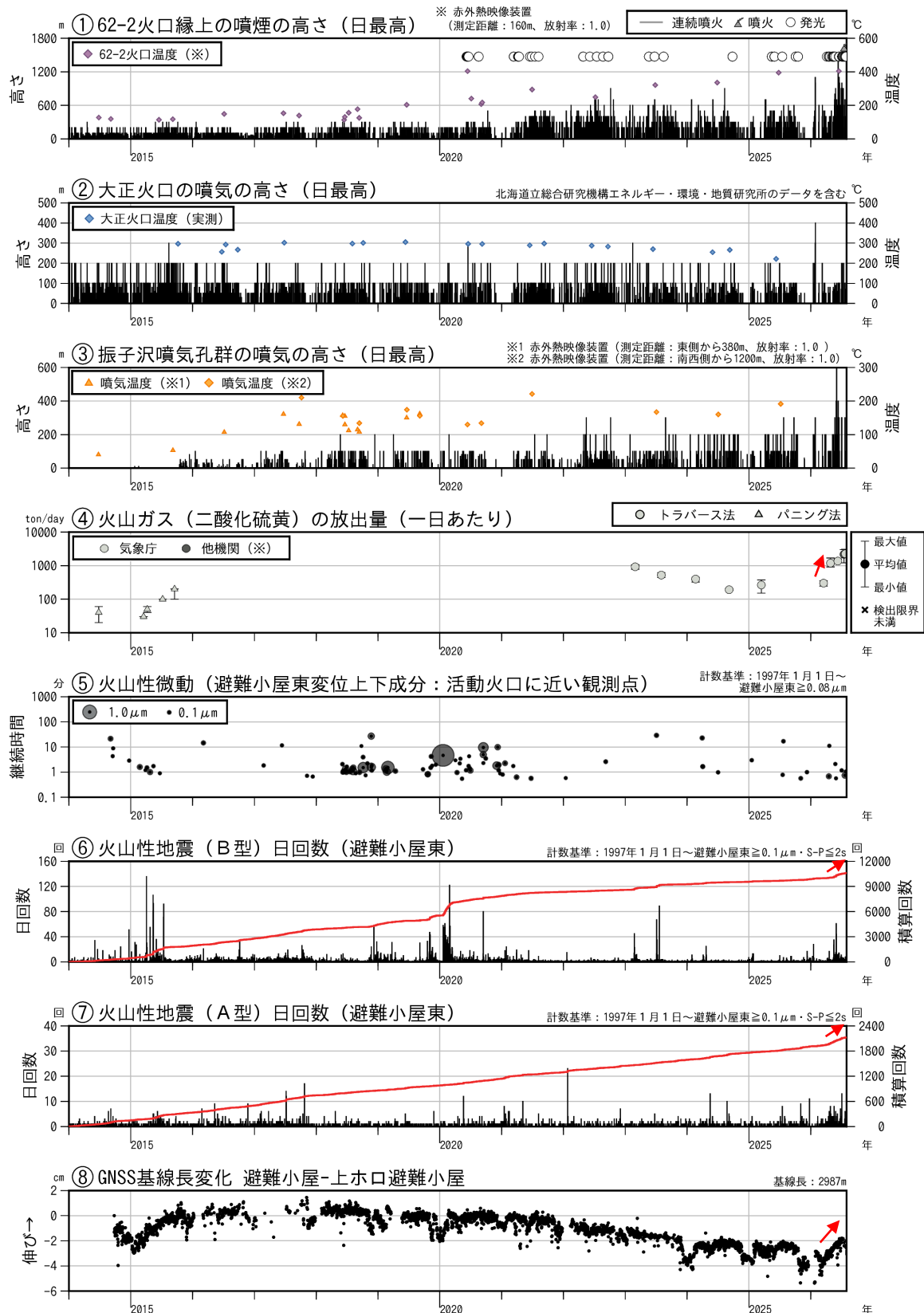


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2026年7月）

④他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。

⑥は主に62-2火口付近のごく浅い所（図10参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、

⑦は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。

⑧は観測点配置図（図13）の基線④に対応しています。

- ・3月以降、山体付近のやや深部の膨張を示すGNSS基線の伸び（⑧）が認められ、4月以降は、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（④）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（⑥⑦）が認められています（赤矢印）。

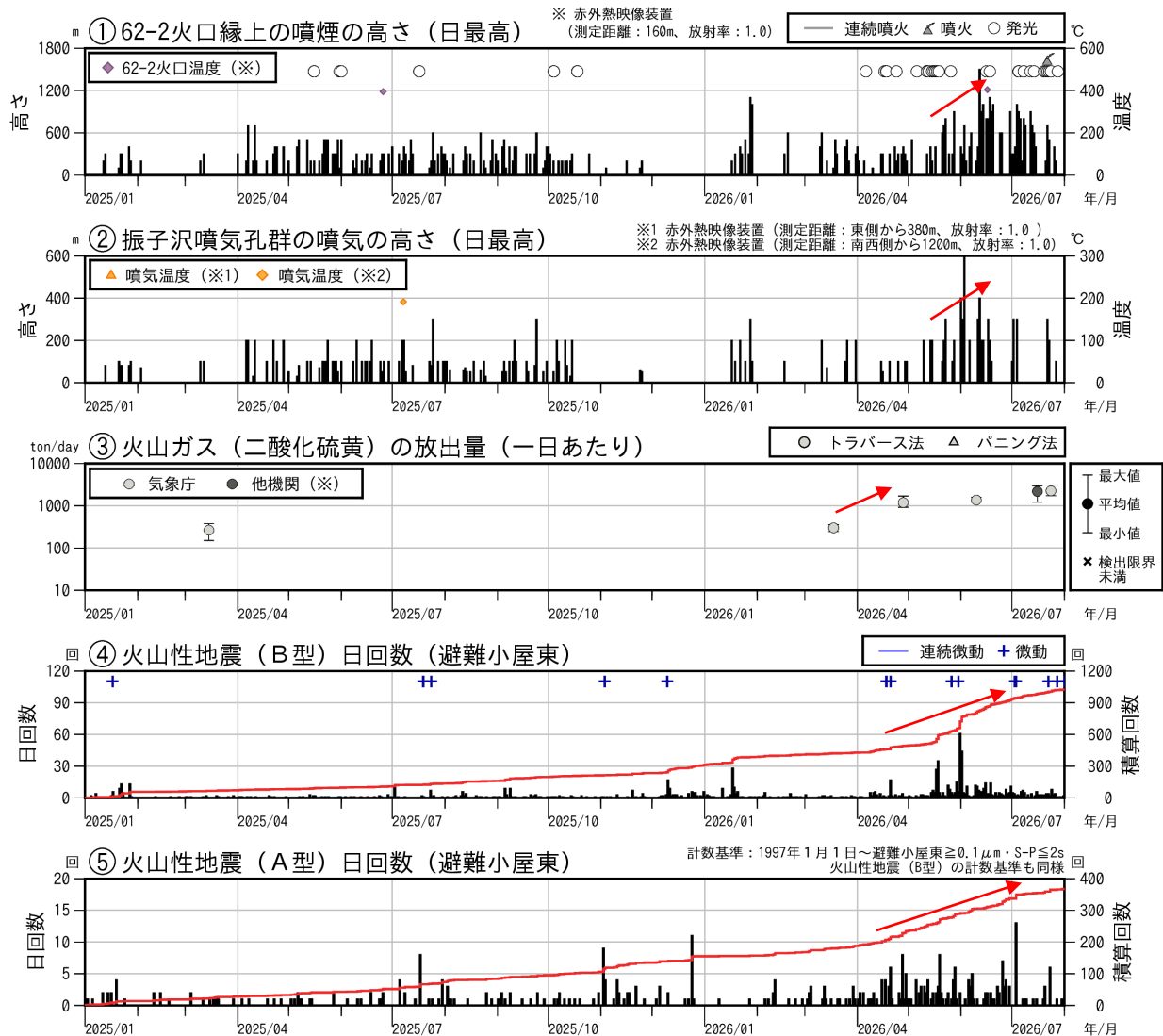


図3 十勝岳 火山活動経過図（2025年1月～2026年7月）

- ①の発光を示すプロットは、監視カメラで62-2火口付近（62-2火口内及びその近傍、振子沢噴気孔群も含みます）で発光が観測された日を示します。
- ③他機関（※）は機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学の観測を示します。
- ④は主に62-2火口付近のごく浅い所（図10参照）で発生したと推定されるB型地震の回数、
- ⑤は主にその周辺で発生したと推定されるA型地震の回数を示します。
- ・24日に気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）放出量は1日あたり2,300トンでした。また、機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学）及び北海道大学が16日に実施した現地調査でも、1日あたり2,000トン程度の火山ガス（二酸化硫黄）放出量を観測しています。
 - ・4月以降、火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加（③）、62-2火口付近及びその周辺の地震活動のやや活発化（④⑤）が認められています（赤矢印）。また、62-2火口や振子沢噴気孔群付近の噴煙・噴気の高さもより高まり（赤矢印）、その後も高い状態が続いています（①②）。



図4 十勝岳 62-2 火口の噴煙の状況

上：白金模範牧場監視カメラによる（十勝岳の北側から）

下：避難小屋南東監視カメラによる（62-2 火口の北西側から）

- ・ 22 日 11 時 07 分頃、62-2 火口でごく小規模な噴火が発生し、灰色の噴煙が火口縁上の高さ約 200m まで上がりました。なお、噴火はごく短時間のうちに停止し、大きな噴石の飛散は確認されませんでした。

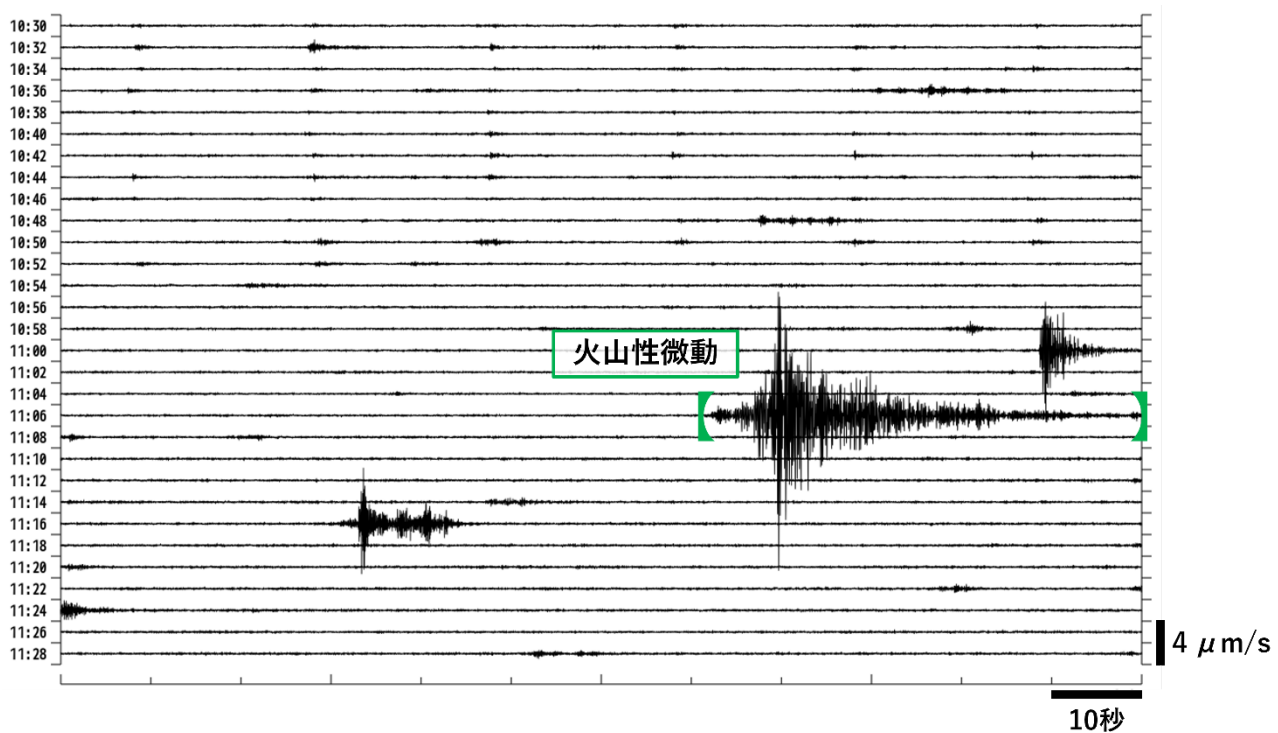


図5 十勝岳 22日の噴火に伴って観測された火山性微動及び空振の状況

上：避難小屋東観測点地震計の上下速度波形（7月22日10時30分～11時30分）

下：噴火に伴って観測された火山性微動及び空振波形

- ・ 噴火に伴い、継続時間が約45秒の火山性微動が観測されました。
- ・ 十勝岳周辺の空振計観測点で、62-2火口での噴火に伴うと推定される振幅の小さな空振を観測しました。避難小屋観測点では最大0.76Paの空振を観測しています。



図6 十勝岳 写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）



図7 十勝岳 振子沢噴気孔群の状況

南側上空（図6の①）から撮影

- ・ 8月5日10時40分頃、振子沢噴気孔群の一部からごく小規模な噴火が発生したことを確認しました。

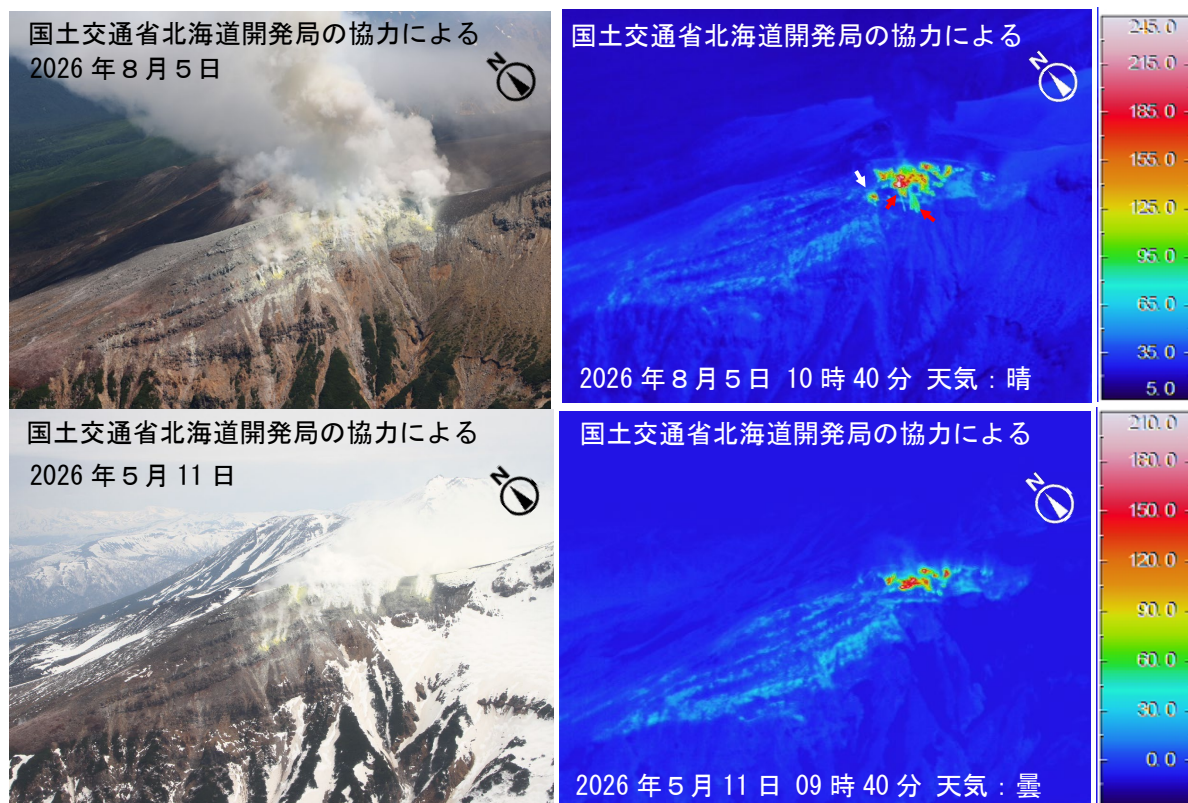


図8 十勝岳 赤外熱映像装置による振子沢噴気孔群の地表面温度分布

上：南西側上空（図6の②）から撮影 下：南西側上空（図6の③）から撮影

- ・10時40分頃に噴火が発生した領域（赤矢印）では、地熱域の高温化が認められました。その他一部の地熱域でも、5月11日の観測と比べて高温化が認められました（白矢印）。

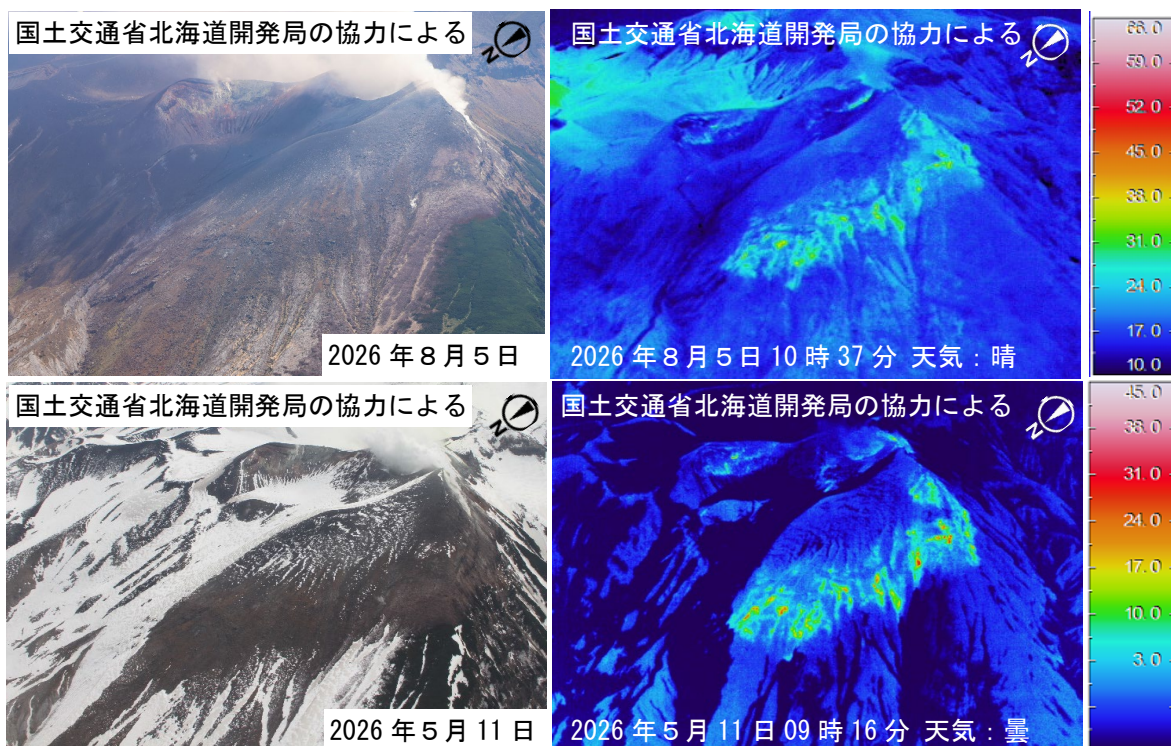


図9 十勝岳 赤外熱映像装置による前十勝北西側斜面の地表面温度分布

上：北西側上空（図6の④）から撮影 下：北西側上空（図6の⑤）から撮影

- ・2026年5月11日の観測と比べて、地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。

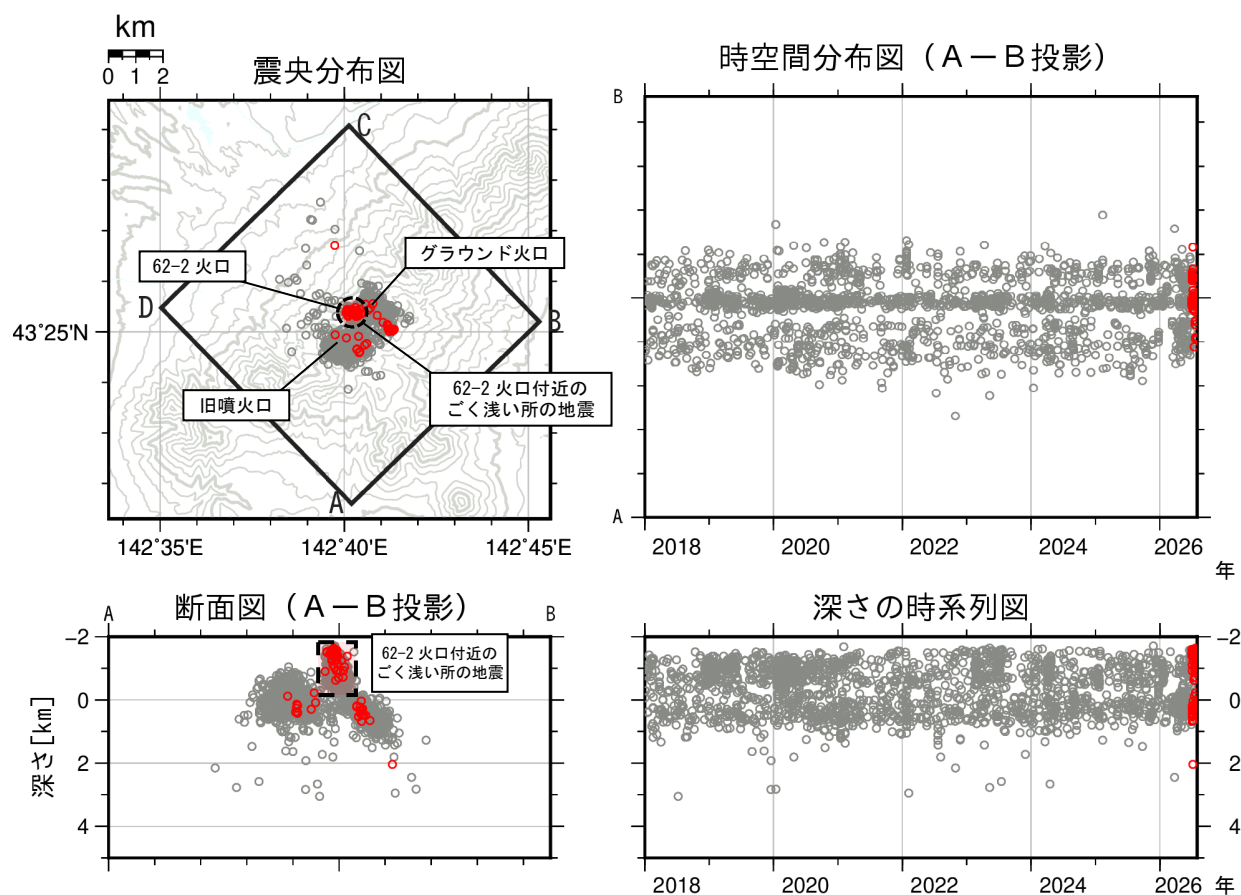


図10 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年7月）
○：2018年1月～2026年6月の震源 ●：2026年7月の震源

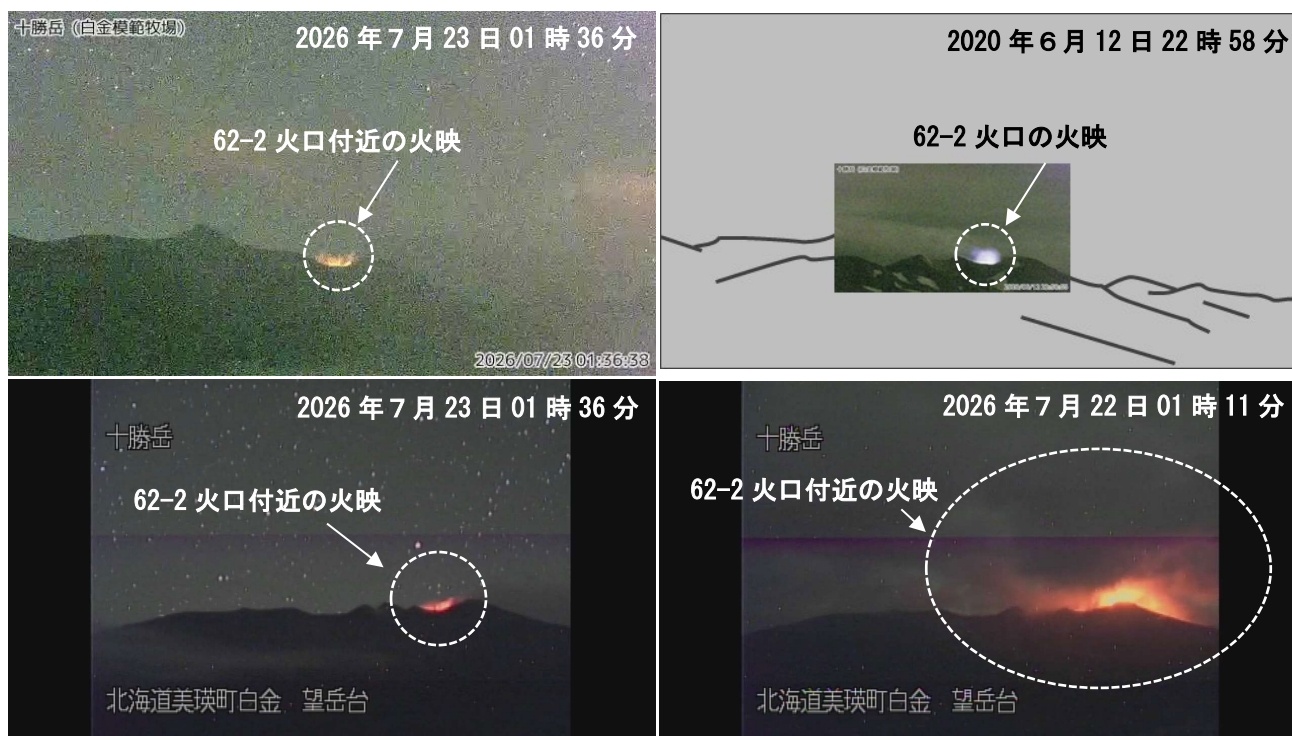


図 11 十勝岳 62-2 火口付近で観測された発光現象（火映）

左上：23日に観測された火映（白金模範牧場監視カメラによる）

右上：2020年6月12日に観測された火映（白金模範牧場監視カメラによる）

左下：23日に観測された火映（望岳台（開）監視カメラによる）

右下：22日に観測された火映（望岳台（開）監視カメラによる）

- ・22日は白金模範牧場監視カメラでは視界不良でしたが、望岳台（開）監視カメラでは強度1の火映を観測しました。

表 1 十勝岳 2026年7月に観測された62-2火口付近の発光現象（高感度の監視カメラによる）

※1：発光現象により火口上の雲や噴煙が明るく照らされた現象を観測した場合には、火映として表記しています。

※2：強度0は肉眼では確認できず監視カメラ（高感度カメラ）によってのみ確認できる程度の火映・発光現象、強度1は肉眼でようやく認められる程度の火映・発光現象を示します。

62-2火口付近とは、62-2火口内及びその近傍を示し、振子沢噴気孔群も含む領域を示しています。

観測日	発光現象※1	発光現象の強度、発生状況
4日夜	発光現象	強度0※2、断続的
5日夜	火映	強度0、断続的
8日夜	火映	強度0、断続的
12日夜	火映	強度0、断続的
13日夜～14日未明	火映	強度0、断続的
20日夜～21日未明	火映	強度0、断続的
21日夜～22日未明	火映	強度0～1、断続的
22日夜～23日未明	火映	強度0、断続的
23日夜～24日未明	火映	強度0、断続的
28日未明	火映	強度0、断続的

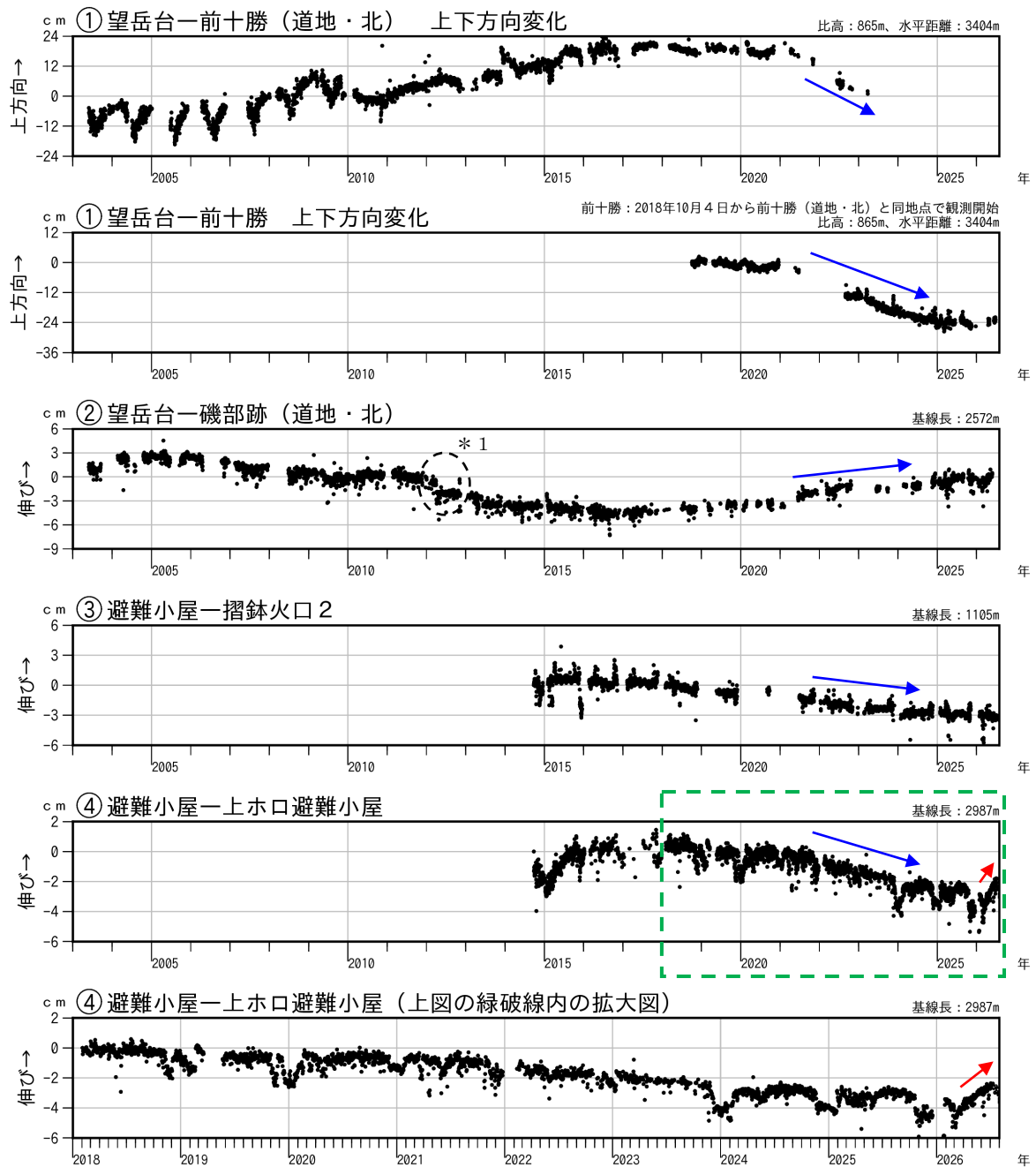


図12-1 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2026年7月）

グラフ①～④は観測点配置図（図13）の基線①～④に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によって考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

- ・ 基線①～④では2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の変化及び沈降（青矢印）が観測されていましたが、2022年頃からやや鈍化し、2024年秋以降は特段の変化は認められません。ただし、62-2火口のごく近傍の観測点を含む基線①では、観測点付近の局所的な変形の影響も受けていると考えられます。
- ・ 基線④では2026年3月頃から山体付近のやや深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化（赤矢印）が認められています。

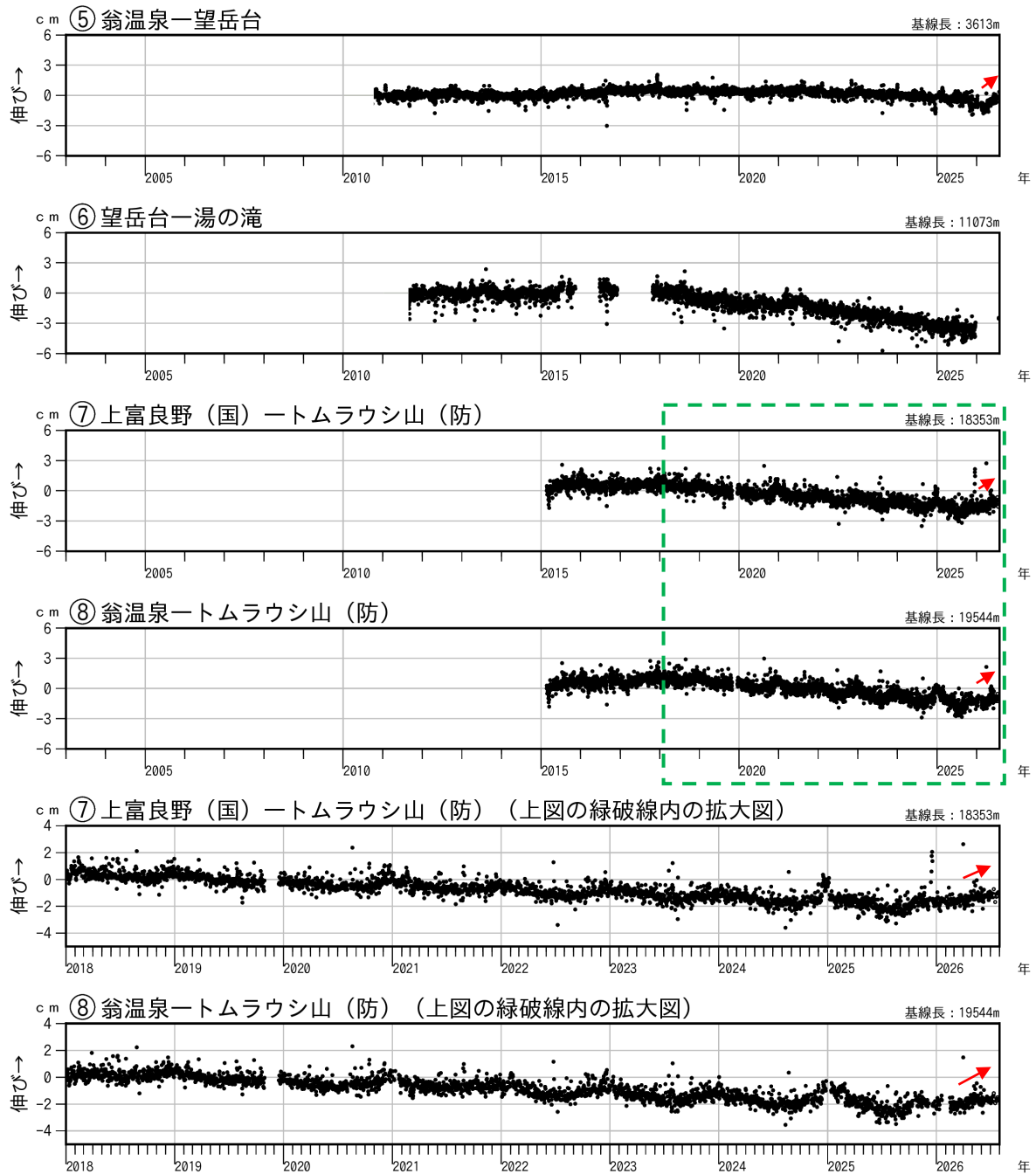


図12-2 十勝岳 GNSS連続観測による基線長変化（2003年5月～2026年7月）

グラフ⑤～⑧は観測点配置図（図13）の基線⑤～⑧に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。

白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

- ・ 基線⑦⑧では、2018年以降ごくわずかな短縮傾向が続いていましたが、2026年3月頃からは基線⑤⑦⑧で伸長が認められます※（赤矢印）。これらの基線の伸びは、山体付近のやや深部の膨張を示していると考えられます。

※例年8月頃から12月頃には同程度の伸びが認められますが、これは大気の状態変化の影響によるみかけ上の変化と考えられます。2026年3月頃からは、これらとは異なる伸びが認められています。

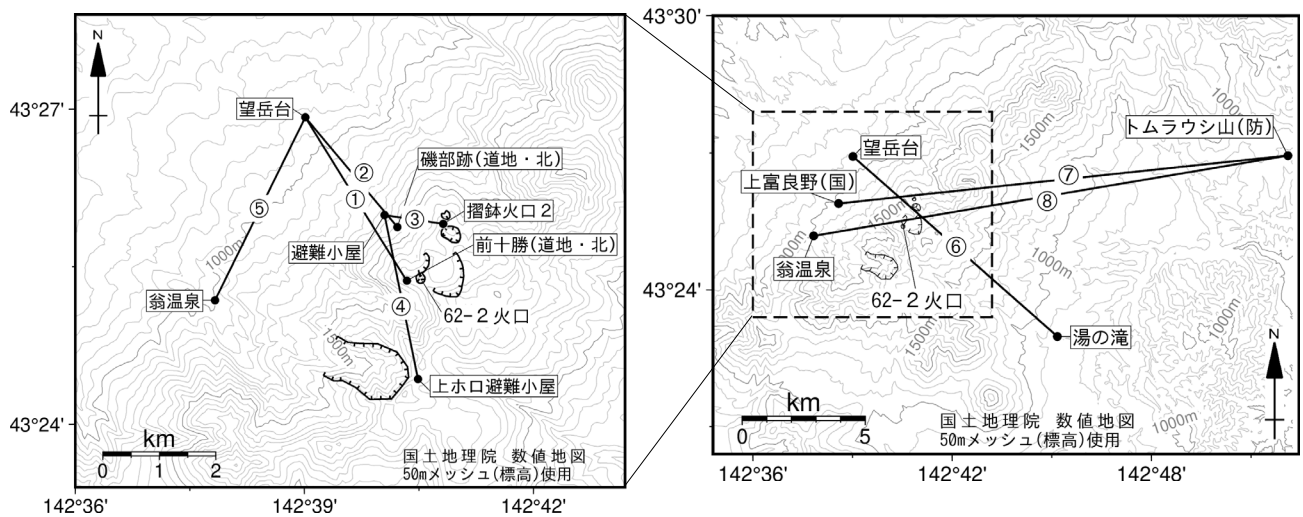
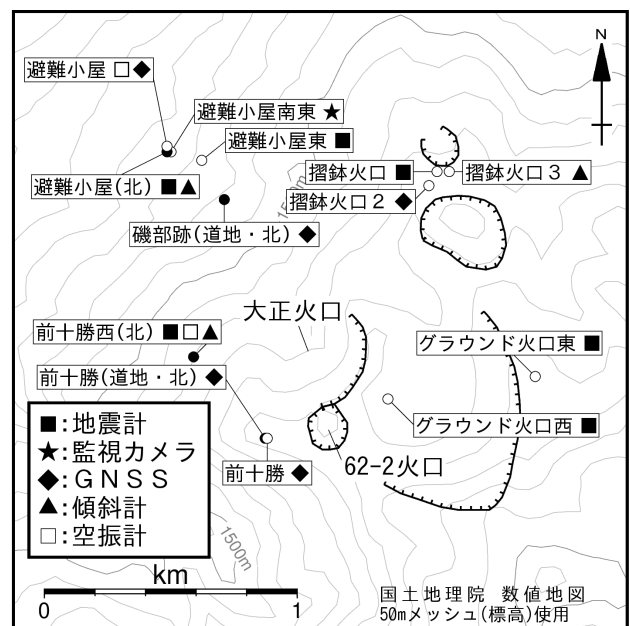
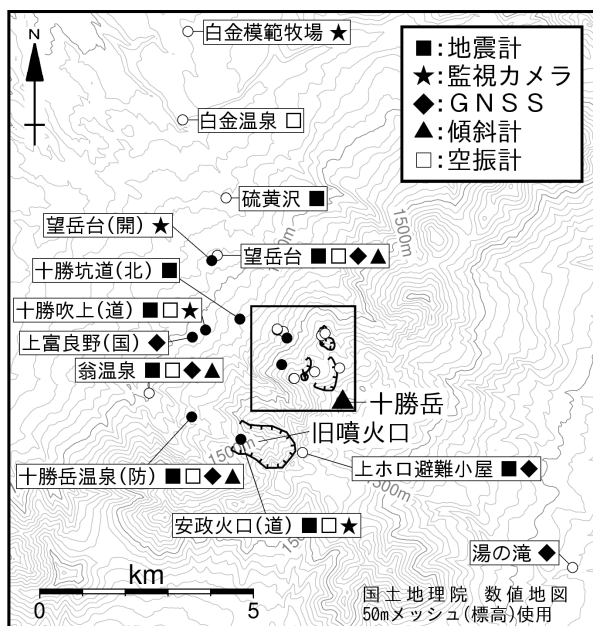


図13 十勝岳 GNSS連続観測 観測点配置図

図中の基線④は図2のグラフ⑧に対応しています。

図中の基線①～⑧は図12のグラフ①～⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。
 (開): 国土交通省北海道開発局、(国): 国土地理院、(北): 北海道大学、(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道): 北海道、
 (道地): 地方独立行政法人北海道立総合研究気候エネルギー・環境・地質研究所

図14 十勝岳 観測点配置図